人物で語る日本デンマーク

㉒ 松坂啓蔵・吉澤正一

松坂啓蔵は、現在の長野県下伊那郡泰阜村で生まれた。松坂は、明治用水開通後の一八九五年（明治二八年）、安城町横山（現在の横山町）に移住してきた。その際に、梨の苗を水田に植え付けた。松坂が安城で梨を栽培しようと思ったのは、彼の故郷である伊那谷の扇状地で盛んに行われていたことによる。松坂は、碧海台地の風土が梨栽培に適していると考えたのである。これが安城梨発祥の由来である。松坂は、さらに池浦にも梨園を開き、分家を出した。

松坂の梨栽培には、安城の農業の特色である多角形農業の萌芽を見ることができる。その後、梨栽培の有利さが認められて、梨栽培が横山や池浦などで広まっていく。その中で、より消費者に好まれる品種が栽培されるようになった。『長十郎』が一九〇七年（明治四〇年）に、『二十世紀』が一九一五年（大正四年）から栽培されるようになった。長十郎は「果汁が多くて甘い」、また、二十世紀は「皮に光沢があり、肉質が細かく、純白で柔らかく、果汁が多くて甘い」と消費者に好まれるおいしい品種だったのである。

しかし、これらの品種の栽培は簡単ではなかった。害虫や病気、特に黒斑病の被害が多かったからである。これらの対策を考えたのが吉澤正一である。

吉澤は、安城町横山で梨農園を経営していた。そのとき二十世紀の栽培を始めたが、害虫や病気のためうまくいかなかった。そのため、害虫や病気によく効く薬があると聞いて、わざわざ横浜まで出向いて薬を求めたほどであった。

その栽培に対する飽くなき研究心が功を奏し、ついに「有袋栽培」を考えついた。有袋栽培とは、ハトロン紙で作った袋の中に親指ほどに育った梨の実を入れて、害虫や病気から保護する栽培方法である。名古屋の佐久間商店などと共同で「ろう紙」を開発すると、有袋栽培が広まり、優良品種二十世紀の栽培も再び行われるようになったのである。

昭和初期には、吉澤は、梨園経営者として全国から視察者を数多く受け入れるようになった。一九二九年（昭和四年）、高松宮も梨栽培の視察に訪れたほどである。しかし、高松宮が梨園を訪れたのは十一月であり、梨の収穫が終わる時期であったため、視察を迎える吉澤の苦労もひととおりではなかったようだ。

松坂の墓は、安城町多門霊園にあり大切に守られている。吉澤は一九五五年（昭和三十年）二月、七十二歳で永眠した。

文　佐藤知之

安城町横山（現在の横山町）の吉澤梨園

松坂啓蔵ほか２名が奉納した手水鉢（八幡社／花ノ木町）